

都中社研 会報

東京都中学校
社会科教育研究会
発行者 高岡麻美
編集部長 佐藤敏一
編集担当 細谷原一
編集担当 藤原真規

つなぐ、つなげる

東京都中学校社会科教育研究会 会長 高岡麻美
(東大和市立第二中学校長)



昨年十一月に、次期学習指導要領に向けた諮問が中等教育審議

議会に出されました。これからの時代を生き抜く子供たちに身にかけて欲しい力が、今後審議され、平成二十八年度には答申が出される予定です。一方、現学習指導要領の全面実施三年目が終了します。言語活動の充実をはじめ、各校や各区市町村の研究会で、意欲的に授業改善や研究授業が行われていることに深く感謝申し上げます。今年度、都中社研会長として、心に深く残っていることは、「つなぐ、つなげる」大切さです。「つなぐ、つなげる」とは、縦と横の「つなぎ」があると思います。「縦のつなぎ」の一つは、都中社研の歴史をつなぐ大切さです。都中社研は、今年度で六十五年の歴史をもった教育研究会です。歴代会長をはじめ多くの先生方が、明

日を支える中学生のために、心血を注いで社会科の研究を続け、充実した授業の在り方について模索してきました。現在、東京都ではたくさんの若い先生方が誕生する時代を迎えています。このような歴史ある都中社研の研究をどのように若い世代の先生方へ引き継ぎ、

発展させていくかは喫緊の課題です。今年度も、夏季研修会や示範授業等で、多くの若手の先生方にお集まりいただき、授業力向上研修に取り組んでまいりました。二学期初めや終わりの忙しい中でしたが、ともに研鑽を積むことができたことは、大変うれしいことでした。また、皇居周辺の都内巡検では、実際に見て、聞いて、感じることで知見を広め、社会科教員同士のつながりも深めることができました。

また、「横のつなぎ」も大切です。都中社研では、研究部のもと、地理、歴史、公民の三つの専門委員会を月に一回程度の例会をもち、研究を進めています。その成果は、今年も二月二十四日に三分野合同

研究発表会として、発表させていただいており、また歴史専門員会は、十一月に滋賀県で行われた全国大会で、発表させていただきました。このように、毎年全国大会で都中社研として、発表させていただく機会があるのは、各会員の励みになっており、大きな刺激にもなっております。今後も三分野の専門委員会が連携して、社会科としての指導方法や評価方法を工夫し、いかに子供たちの公民的資質を育成していくかは、大きな課題です。

さらに、新たな「横のつなぎ」として、小学校や高等学校等との連携も考えて行かなければなりません。今年度の示範授業では、区内の小中学校社会科教育研究会や埼玉県の社会科教育研究会へもご案内を送付させていただきました。また来年夏に高等学校の全国歴史教育研究協議会が東京で開催されます。昨年度、小林誠前会長のご尽力でホームページも開設されました。このように、様々な「つなぎ」を大切にすることが、新たな「縦や横のつなぎ」を生み、そのことがより良い社会科教育の充実と発展につながり、さらには、「目の前にいる子供たち」にこれからの挑戦の時代を生き抜く力に身に付けさせることにつながると思っています。

最後になりましたが、今年度の諸活動に御理解と御協力を賜り、心より感謝申し上げます。来年度もどうぞよろしく申し上げます。

第三十二回関東ブロック中学校 社会科教育研究大会に参加して

田口克敏
(小平市立小平第三中学校長)

平成二十六年十月三十一日に群馬県内を会場として、標記大会が開催されました。今大会の大会主題は「主体的に学ぶ力を育てる社会科教育の展開―考える楽しさ・伝え合う喜びを育む授業づくり―」であり、地理・歴史・公民の各分野ごとに三つの中学校を会場として開催されました。私は、群馬県吉岡町立吉岡中学校で行われた公民的分野に参加しましたので、そのことを踏まえて若干の報告をいたします。

群馬大会では、主題の「主体的に学ぶ力」を「自ら課題を見つけ、自らの力で課題を追究し、その成果を活用し社会生活や現代社会の課題とその解決策を考える力」と定義し、三分野別に研究主題を設定しています。公民的分野の研究主題は「現代の社会的事象と人との関わりに着目し、その課題解決に向けた思考力・判断力・表現力を育てる授業の工夫」でした。ここでは、共通あるいは異なった経験をした生徒同士が交流する活動を設定したり、社会的事象に関わる専門家の支援を得ることで、より深く理解することができ、伝え合う喜びを育むことができるであろうと考えています。

「地方の政治と自治」の単元において、地元吉岡町を題材として地方自治の仕組みや財政、直接請求権等の基本事項の学習の上で、生徒達が「住み続けたい吉岡町」にするためにどのようなことができるか考えよう」をねらいとして行われました。前時までに行政の専門家としての町長の話を聞いたり住民アンケート結果を分析したりなどの積み上げの上で、グループごとに分かれて、互いの意見を交流させながらグループとしての考えをまとめ、さらに発表による全体共有を行い「吉岡町のためにできること」を追究していました。整理されたワークシートに取り組むことで、生徒たちには思考の流れが明確に意識されており、付箋などを活用して多様な考えが表明されるよう工夫されていました。一方で、折角多様な考えがグループ内では出ていても、全体共有では一つに絞って発表しなければならぬため、個人の意見をカテゴリー別にまとめる表示を工夫するなどの改善策があると、生徒の思考の深まりや判断の場を提供することに繋がると感じました。

関東各地域でのこうした取組が明日の社会科教育を支えていることを実感する大会でもありました。

全国大会に参加して

詰 田 剛 也
(江戸川区立小松川第二中学校)

平成二十六年十一月六日・七日、第四十七回全国中学校社会科教育研究大会・第二十回近畿中学校社会科教育研究大会が滋賀県で開催された。

基調提案では、大会主題である「社会を創る力を育てる社会科学習」が基に、滋賀県での取組みと実践が報告された。「変化の激しい二十一世紀の社会に対応できる力」の育成を研究の主題に置き、その中で、「平和で民主的な社会を構想し、自ら創り上げようとする力」を育成しようとした。この力を「社会を創る力」と呼んだ。報告の概要は以下の通りである。

中学校社会科学習の課題として、生徒の多くが、社会科学習を暗記教科として捉えてしまっている点を指摘した。つまり知識の習得が生徒の最終目的となってしまうというということである。これは、語句や年代の記憶には、熱心に取り組むことはできて、社会的現象を大きく捉えて解釈したり、自分の言葉で論述・評価したりすることがなかなかできないという課題につながる。「何を知っているか」という知識を問う学びから、獲得した知識を基に「いかに活用

していくか」を考える学びへの転換を図る必要がある。この学びの変換を図るために、「わかる」「つながる」「つくる」という3つの学習活動を連動させ、社会の変化に対応し、よりよい社会を構想、自ら作り上げることができる公民的資質を獲得させようとするのが、今回の研究テーマである。

ここで提案された「わかる」とは、基本的な知識・概念の習得だけを指すのではなく、それらの知識を活用し、読み取ったことを熟考・評価・論述することができる総合的な理解のことである。従来から、資料を読み取りながら考察する活動は行っていたが、生徒の活動が、資料の読み取りだけにとどまってしまうことが多かった。その反省から、いかに知識の活用ができるかを身に付けるかを検討した。そして知識の活用を図るため、思考・論述活動を授業の柱とし、気付きの書き出しからはじまり、段階的に根拠に基づく論述へとつなげていく積み重ね学習をすることで「わかる」力を養わせようと試みたのである。またより深く「わかる」ために、「つながる」と「つくる」学習活動を組み合わせていくことが重要であるとしている。「つながる」とは、自分と異なる価値観をもつ人々との対話をすることであり、「つくる」とは、自分たちの意見を発信しながら、異なる価値観をもつ他者と合意形成を図ることである。

二日目に守山市立守山南中学校で行われた公民的分野の公開授業と協議会に参加した。地方自治の単元で、守山市中心部の再開発を考えることが授業のテーマだった。授業者の宮下教諭に話を伺うと、当初出された生徒たちの再開発案は、大型ショッピングモールを誘致する案しか出なかったらしい。

授業の中で、自分たちの住む街でのフィールドワークを重ね、地元の実情を目にした。また地域の人々から、現在の課題や将来の可能性の話や聞きうちに、再開発案に変化が出てきたと、宮下教諭は話してくれた。多くの生徒は、成人しても、このままこの地で生活するらしい。将来自分たちが、よりよい生活をするためには、どんな街をつくらなければならないのか、当事者として考える心を「つながる」学習によって獲得していったように感じた。地元で地域活性化に関わる方々をゲストティーチャーに迎え、そのインタビューを基に班ごとで個性的な再開発案を発表した。獲得したさまざまな情報を活用しながら、将来自分たちが過しやすい街にするには、どうしたらよいか、真剣に考えた姿が印象的だった。

今回の研究実践に触れ、改めて社会科が果たすべき、「生きる力」の育成が重要であると気付かされた二日間であった。

示範授業を参観して

近 藤 沙耶香
(江戸川区立小岩第五中学校)

十二月十一日(木)、足立区立竹の塚中学校で行われた高田孝雄主任教諭の示範授業を参観させていただきました。公民的分野の大項目(2)中項目イの「国民生活と政府の役割」の学習で、本時は「将来の望ましい税制」についての授業が行われました。会場である被服室に入ると、上下黒板の上段に前時に生徒が書いた五色の短冊が掲示され、下段に五つ意見の主な根拠についてまとめてあり、生徒が活動をしやすい環境作りが行われていました。

授業の冒頭で前時までに記入した「将来の税制に対する考え」について、生徒個人が書いた主張を整理し、論点を明確にしました。五色の短冊は意見を色ごとに分けられており、

- ①税制は変えるべきではない
- ②税率を下げるべきである
- ③直接税を上げるべきである
- ④間接税を上げるべきである
- ⑤結論がない

の五つの考えに分けられていました。論点を明確にした後は、同じ意見のグループに分かれ、自分と異なる意見に対する質問を考えたり、自分たちの考えに対して出されるであろう質問の予想と反論を考えました。

その後、教師が事前に調整した異なる意見の生徒で構成されたグループに分かれ、一人ずつ自分の意見を発表し、話し合いを行いました。異なる意見の仲間に説明をするため、ジェスチャーを交えつつ説明する生徒、図を描きながら説明する生徒など、話し合いを活性化に行う姿がすべての班で見受けられました。また、家庭でも「税」について考える機会が多いのか、生徒から「東日本大震災」「所得」「若者の負担」「衆議院の解散」といったキーワードが出てきていたことも印象的でした。授業の最後に教員より本時は結論を出すのが目的でないことや、親は迷いながらも選挙などで判断しているのだという話がありました。

授業を参観させていただいた後の研究協議では関東ブロック中学校社会科教育研究会元会長の久保田靖明先生より、「社会科授業の向上をめざして」というテーマで、社会科公民的分野の役割や社会参画に関する教育、今回の指導案から読み取れる新しい指導観などをご教授いただきました。学習指導要領改訂に向けて動き出している今、改めてこれからの授業について考える貴重な機会となりました。最後に、授業を参観させていただいた高田先生、講演で御教授いただいた久保田先生に心から御礼申し上げます。また、このような機会を与えて下さった都中社研の先生方にも感謝申し上げます。